

批杷園句集

坤

枇杷園句集卷之三
秋

初秋

左の秋の川遊よとてる小きうら

独坐

木の葉のなまらけしむひとり

ちよめや秋半の竹のぬれ

菴戸に拾ひ入るとも桐一葉

星夕

かも川や半そりやらりける星の夕
るの川 糺のすそみさるほろしを
水あひる舟 鳥もゆくその川

舟行

一さし舟 漕入よるの川

灯籠

灯籠の油あうるし 復らる

霧

檀溪

霧よきあはれ 霧住るねる茶の煙

素舟法師らむうりの追福の目

ちうふふれきる思ひあるくさ

丹波のまき阿法師 芥舟は此

紀風ちうき

白雲ふれあつる串るおもひくさ

いまつる

いまつるや 殊不すしき 度の空
山より 舟より 稲妻之ゆる 海の上
舟より 何とぞ

稲妻より 瓜つくと 淀の塘より 那

秋風

あきく 勢や 舟より 舟より 舟より
秋風の 吹きし とき 秋の月

須之 寺の 戸を 閉より あり あり あり

悼松兄

むつ しまし しまし しまし しまし しまし
南より 此松兄の 舟より 舟より 舟より
まて 年の よう ひもい と あり あり あり
先より しまし しまし しまし しまし しまし

何とぞ

秋風や 舟より 舟より 舟より 舟より

朝貞

ひやしきも萩の糸さく垣ねうま
朝さうぬあさうらひさうし
いくほとのせをも萩のすけ枝
蚊屋うしに萩のゆるる旅のうら

萩

霞の萩のやむすひ旅の繩すま
のそくまてまのかく萩の夕のうら

よきまはまのまのまの萩の小庭の

桂五亭

よきまおとくあつらふも萩の萩
萩のまのまのまのまの西日くま

萩

虹のまのまのまのまの萩の声
うらまもまのまのまのまの萩の

女郎花

をさかへてこころをいぬるをいぬる

芒

物さしの秋ももあつて花すしき
芒よのあつてすくさくのすくさく
林にさにあつてやあつてのすくさく
雪さあのかさかふのさくさく

都

は穉のすくさくかある雨おる

牡丹花

をさかの白のさくさく牡丹の花

稲花

湖のさくさくさくさく稲の花

菘

明るおのあつてさくさくさく
さくさくさくさくさくさく

序

一 並ふおきふ日のある河原に
かゝりすやくしるしなくつ田は
十日ちや萩吹しきりし
一 子に鳥のすしき田は
三河の國棟堂を初め日
小舟に棹さして矢矧
川の下流ふあきし

まのしのおのちのあきし

考證

一 序に竿にまねあはれ先こまの
一 ありしあはれ鍵ふまね竹ふまの
一 竿まの鍵ふまねし
一 ひとくまのちやあきし

鶉

わうあふおきしひさし

鴨

あつたれもさつと鴨もさうさう

砧

小松まゆみこ窓のじりしあつたれこ
小松吹伊加つたまゆみこの夕花

芙蓉

月宵く芙蓉日くはをぬの露

月

宵くふ来るものまれを月を友

須六行

ひちうは雨の降

おつたをあつた

小松ふそくをさう

海人象ハ袖ももあつた月のも

あつた申身をすつた

つたすつた煙も七月に名残の

つゝ

月をくらすの影に空路を
延せうたむを覗きあはく月お
ひやくや月小をうらむ木
あ代や山のよりくみの月
ねんや影をや月まそ有ま
名月也いふのそくき月お
月見こそゆや八掛とる小橋

十五日山行

おれ一人と同しるしあきふ
おもしうさめあまき白二日
の月みえろより例の人か
南陽り母の住る雨改もふ
山北此木の麓
白雲跡をかきしつる
さもさうさうさうさう
思ひしうらいとほきて市
中を去る

わつらに一里晴嵐後を登ふささる
現に秋色よ多きと入る木の梢を
月をさすひきとてくみお日のくみお
ことよ嬉しく笑ふ

松や力を花とあてて月見くま
雨の日信濃より申く人を送る
姨捨を雨よのちとあまの月

雨晴山月高

海山を洗ひ阿やあまの月おろ
中秋あ一夕を月を清みてふ
十五日を雨に降風本を
さうり吹あれすれを揚す
降あめをまうめくしうみお
秋のおきめくも志けり月おろ

白岡亭

古きや老のう孫さめにおる月

卓也亭

おもむきし月お侍さるる菴う那

山家に宿くる月おけしきおり
くれをやくも麻寸まおすけお
ころ麻の朝ちく末さうさくや
しあけ待せまくれとくさうさ
うり終ふしおをちあしぬ

おあけても

蘇九月

をぬまうしおまう

画秋具

海をみかきふりけりの漆も月おけ

贈伯先四十賀

千代の坂路のちとよの雪もいさ

もい月お先くはつとよあらし

おもしうし年ふるひとよ月お秋

やまのりまむしころもむしころ月此や
硯静亭

いさよひや月まらうゆく萩のき
八月十六日瓢合を以て

さしちりしき

十六おの雲よめれもく瓢くも
井戸田小き

いさよひもさしちり月見るをき

十三夜

梅ころれ田よし人毛月見くも

三河紀行

空也上人いさくろもと世人も引
ち之さおけくねわり住多ひ
さる山の菴のさばりまき部
四条之辻に菰むしりし住
多しそハ行徳を積るて此上の

あまよそをあたし失くかくしつゝ
愚癡の仰ふをとおもひと入るわき
おもあはす山よそをひ水よそをひ
をほりてよもやと三河の國におか
ふし事なるひとをかくしおてそこ
み大樹寺の地におは寺よまゝつ時九月
十三日ちりりて又殿の山をよこし
あつと清浄迷采よと夕暮り

底よハ水をうを湛へ白雲の頂よハ秋の
色をともりて何となく地をぬか
とすりおて山根れ空のうけにあち
をまらぬ

名をなるとる月をぬかそ殿のと

秋お

秋のおや確ちよくとる位 面

秋のおれあつさめを思ひはくや
書あるに衆十ひふき事らてせひ
よきあゆあつさむしつたすといひ
るやそものくもくあつたえ
古へ人れつひふさ事古言のこそ
多ふささやまもや事引
りき中からほくの事れえ又出く宗
して西行をや城のあゆつ

あれ蓮のすこ作ら朽木を
朽木はまよくあつさくう思ひ入
よきなうやちう山の鳥も鹿の時
あすみやとは誰くおまふ
あつさむしちえうか
さむふおのうきありは深
秋のおろそ
はさうり

上のおふも

秋雨

秋聲うら菴こゑ

住る心さよこそよれ秋のあ

ころもう浦よそ

秋のあともくろくた日ハ入ぬ

彼岸

菘とれ鳩の豆まきひうんう那

秋山

枯るひささねそよゆと秋の山

秋水

鶯鳴み色あろも深よあまのあ

鹿

鹿鳴^たこ書きと啼おもあん

夕のけももゆけハ鹿の聲

芳中[。]山雪江う菴こあそひ

門中[。]ゆくひと鹿の聲

秋葉山の麓和田の屋敷

いよきまにぐりのきり

寧ろ鹿の苑よりと保ま栖り南
明果よりうきまきくも鹿の啼き

菊

去りきくの山路りすねぬもありねを
むらつきよの老くねぬまきく此花

送花叔帰故郷

父母をりんるふれしきまを菊の花

訪草菴

くやふし菊もつくぬ庵の度
白露れしりそありしつぎまきくは
花あまきり菊あまもあし寸ハ草サ津

お中九日

重むくよ一枝くれよまきく此ぞれ

五葉

くささ来たれい水はあゝくみさる

秋暮

西子見ふ山のささよあふのくれ
よひ月はおや〜やするそ秋のくれ

大々稗亭

日のくれぬ日あけれとも秋のくれ

父の葉山子

お〜ろさひじに〜ぬか〜

無題

蜻蛉の十そ〜枯枝〜

福志〜や刈や田〜替夕〜

片麻留〜久〜壺〜

松うさよ朽まよ〜菴の灯ハ不き〜

悼如東贈帶梅

あさき〜の人の親さ〜つれ〜ゆ〜

八月八日の日遊行上人を江の國へつら
まゝとてひーのくやとて四十九院をま
まにけるも多の葉の内をうんむき
おとろみしは縁の上をもすきして
結納もすはりし

東次子

何を〜ひとくすも次子秋

九月十日を江に園

有玉をいふま

月七日に江に

不考のや

卓池輯

枇杷園句集卷之四

冬々

時雨

冬の時雨 ぬるさう ちかみ ちかみ ちかみ
雪海を 一し くれそ あらと 子鞋の 孫

竹葉軒

きし 舟よ さや くと 降し くれうま
独居や 古人うや くの 小おし くれ

時雨来るるうらうを何言此琵琶の正
かゝる夜のつらさなほこそ世の傍る
まゝれとさう琵琶をひきよめるまゝを
め

落葉

あゝ葉々々々朝のすけり風おちさす
あささくや落葉松下寸屋根の
不破の園りまゝ

おあよあやまゝのりる此白果ふく落葉松

大和の園を行掃して畝火のやろ
いつと耳を山をとりそをまつ
あゝく山のあまに推まのまゝを
叫るまゝのまゝのまゝのまゝ
まのまゝとひらまゝとまゝと
まゝとまゝとまゝと
けくも耳を山を落葉松

木枯

去り〜や〜さ〜は〜ぬ〜る〜池の鴨
梅 写る〜

ち〜く〜や〜日も〜か〜ぶ〜の〜昔の〜
去〜く〜や〜日〜ふ〜く〜死〜る〜寒〜さ〜の〜し〜く〜
去〜く〜や〜海〜一〜そ〜ん〜と〜あ〜る〜月

綱代守

字 信 工 書 あり 日 あり 一 あり 一 あり 一 あり

干き

生 海 嵐 あり 袖 の さ ざ ざ 一 筆 ち ち ち

梅 ち ち や 一 敷 の く ち ち も 一 筆 ち ち ち

五道亭

鴛 鴦 鴨 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

大浦

湖 を 鴨 て 埋 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

冬月

あくまでも深きあきと冬の月
さつこくと苔ふも冬は月お光
さ満くと降けくさや冬の月

大魚追悼

ほハ父ちるるハ子よかれ尾花

枯野

むつまゝ住やう水野とむらう家

詩仙堂帰路

大山のささこもくれゆく枯野うら

訪野菴

かれくや野をにお向ふ庵の犬

麦河菴を訪ひて

これ見よと霜の田芥を菴は忘

花よかさらひ月よちまふ夫書の花

五百生れ者縁を切てさう一夜の
霞もきえぬふそをうきまきおもも此
悲ひも多きこそそ申よ心をもきみけり
子供残れるあはれいまこそいひさて弟を
おゆつをいふをうらまひたづてをちり
何やれ実一心をも見るこころちりるは
又まゝこころとせぬあはれちりるは
山吹の實やとおおもてまの枝り

朝沼のさやを輝く露に
ゆく

雉も啼く犬も吠おおれ山をうれ
氷

勝山を舟さし下せし藤竹洞に
この日ちえの風あはれ雪さく
降るも雪さくさくを徹す

白浪のうねりも氷る小さしのかち

冬木立

芭蕉翁百回志

十句巻阨

ちぢあそよふもものすききりて冬木立

雪

まきくに雪のれきき山見しよくらも
えつ雪や人のくれきもひの木立
暖やあひりし雪にけりし

雪掃やけつあそく来さず啼く雀
さいつても雪ハ降しきりて鳥山家
月雪やこよひも月ハ雪ハけり

念

毎よきあるも念にさけるおももさる

御事しと

あももちのきこつれさのれなく御事しと
南無月夜南無雪時雨御事しと

春暮

年の満さに暮るむやもく日未あけ
いふにゆき沖く夕に湖水ある猫
藤竹をよら溪水をけりるそ
其上におつ池塘尾花枯て雪おそく
鳥鳴新沈き水底は清く是より
路を西よとよきとゆふ苔路中くは
杏をうして民家適に見ゆいさや年の
用意もして蓬菜のうきう松菜菜
やうのもの引とらうそ

ゆくゆく一の元九日も子の日うも

大いふと一む月の一白きうきあ三五
孝暮春雨菴の大人といさあをねて共に
子日と一やまの竹よあ柳より水を
けしきり月あやのさるりつ
おもいとも亦なる年のうきも来より一

年の始終を来りよるやいふこと
たしく心を感あること

野秀亭

條々もや 飴のくるくる 藪のふ
ゆくゆく のこそつともせぬ山も
年ももや小松うら来る日市
上にならぬや 角力あはむ
少くもや 木も葉も角力あはむ

花月一葉のあそびに くらむ日も
既よくれや ちもや一瓢の
酒の残るも ちもや一瓢の
ちもや

瓢 西早
乾 おさへ

蕉雨輯

枇杷園句集卷之五

雜

倉澤

夕のも見しくさるる不考の山

よしのみく馮月々四十の賀よ

あふれお山さるるきふひよの取しき

大空の隈さるる雀のよはひひう那

住けひさるかしくさき竹のさやうか

海人の子等の潮み干浮にむねおさ
け木捨ひあゝるもさるるうねりや
来ぬハレ言をちきりしも帰る
さて遊しあゝるまにあつて
浮のちるちるハネにまな
多くハレの鳴ゆるハ浅千代
多ふんと少のそと

中佳帝やうもころと和方の浦

大黒禊

花よ實よ四時やハれ子の日料

多春園の栞見せさやまふ
うらむ侍る泉石のやハ
赤を栞るまのこも栞さ
七日の日早き栞ハちる浮ひて

けしきおとに おもしり
家の上漕せゆへもる象浮の京鏡
おもひやらねるさよ漕およもさ身
とくはる希侍ねとくよりこふもゆも
そくもあるもきくも五文字のま
のそはさくらから本保まこまにふ
傳雲園よぬる

朝土傳雲思や在花深處

暮下傳や思花深處未

暮津晚會

東會三子又百峰晚雲中

出芙蓉芙蓉白雲千秋色

入寂林照古松

平曲會式

床頭置琵琶二面

彈中或弦斷則頓設一面

急以代之

曲中禁談笑吸烟管步
唾壺必應有意凡曲調
者貴欲暢々々則說盡

曲中可限了

學了能舞之海やうに月お光

余もあま

何の時時ふあまも人遊めりて

連歌あそをきりて山后走る水の音は

ふよさうりて句案年わたる

おぢやハももぢて流壺に恋う枝を

歩入さび力さうりてあはれあり

と記了り

曲終不収撥更唱祝世之句

琴吹助音

あまもあまも曲終了り

櫂を引くはゆるぎなきを

脱袴

把盃

洋城在心形素已忘蕩然

山頽亦復不妨

瓢效并序

形便... 不用の力を

此も自然を事のも瓢有ある義の

是に一口をひきまひ、居然と

忽有用は物である。赤人の草西行の

庵の落葉うね蓮歌性の効は及古く

大師の瓜下芭蕉は翁は雪と雪越人

凡雅の落思も毛みあけ入る

ぎに便く... 瓢效

てきて白わり自然を

自然を失へり翁叱して曰汝小山を
めし何と云い人曰寂し酒を
何と云い人曰躁し米を
いそぎ曰勤し又叱して曰呆し
汝何ぞ自然を失ひ人曰西
然し中於て曰

鷗く櫂をわきぬる鷗

同 流の藻陰草 点虚瓢

鷗く櫂をわきぬる鷗

同 ちうれのめる瓢 点虚瓢
ちうれちうれや冬の海 点虚瓢

松兄輯

讀

牛樹の翁老い〜あや
一〜百の十歳日風月花
〜とけ〜日〜
相峰す留あ〜二百年白
自留翁の〜九
集の〜



肥後県立図書館蔵書印

集〜翁の〜九
つゝ〜翁の〜
かく〜風月相峰の博志翁
翁集乃雅情といふ

角足庵

岳輅

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and appears to be a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. The overall appearance is that of an old, possibly handwritten, record or letter.

